カン　ドンフン

戦争体験談　康　東 勲（カン ドンフン 当時8歳）

1945 年 3 月 10 日 東京空襲を見た記憶

夜空に繰り広げられた米日軍の一大パノラマを飯場の窓辺で見る

3 月 10 日、国民学校 1 年生の時、日立航空機千葉製作所内の飯場で、夜中、父にたたき起こされ言われるまま窓辺に、背伸びしては目をこすりこすり、前の海(対岸は東京)を見ると、下は真っ黒で上は真っ赤に燃えていた。

真っ赤な空には、鉛筆のキャップ程の銀色に輝く物体が南側から北の方向(銚子方面)に炎の上をゆっくりと競うように浮き沈み、その物体は限りなく現れては消え、また現れる模様に見とれながら、良く見ると地上からはサーチライトが左右に交錯し舞い上がった炎の燃えごみがぱっと消え、雨のように降り注ぐ光景はいままで見たことのない、綺麗な夜空の花火のような(不謹慎だが)シルエットに驚きながら夢中になって見とれた。

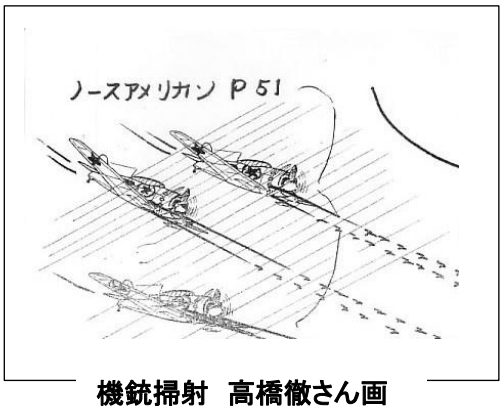
父に銀色に輝く物体は何かと聞いたら、「あれは敵機（B29）だ！よく見ておけ！今東京は火の海で家がみんな燃えているので、空が赤く見えるんだ、恐らくあの下では大勢の人々が死んでいるはずだ、お前の将来の為によく見てしっかり覚えておけ！」と諭された記憶は今でも生々しくよみがえり、家族や孫たちに話したりしたが、今では 3 月 10 日の夜は、西空(東京の方向)を眺め、思い出し、「戦争反対」と握りこぶしに力を入れている。

機銃掃射 2 回、命拾いした恐ろしさ

一回目の命拾い

1 回目の艦載機機銃掃射は、蘇我国民学校 2 年生になった 1945 年 5 月の始め頃、学校からの帰り道、仲間の知人に「これからそこで(日立航空機千葉工場の分場(今井町))の日立会館で映画が見れるので来ないか」と誘われ、3 人は恐る恐るついてゆき、日本の空軍が勝っている勇ましい空中戦などの激しい戦いの名場面に、私も従業員と共に「わーっ」と歓声を上げ、興奮冷めやらぬまま外へ出て、家路を急いだ。

蘇我踏切(現、今井跨線橋)の 4～500m 手前を午後 3 時ごろ 3 人で、「日本軍は凄く強いな」と戦闘場面を思い出しながらそれぞれの感想を話しながら歩いていたら、後ろから「脇へ伏せろ！」と言う大人の大声に何事かと驚き振り返り見たのは、東の方角から敵の艦載機が急降下してきたので、みんなびっくりして、それっと言わんばかりに麦畑になだれ込み、身を縮め耳を両手で塞ぎ、息を殺していたら「ザザザッ…」という轟音と、横の砂利道は先が見えないぐらい、しばらくの間砂煙がもうもうと立ち上っていた。　艦載機は真っすぐ西の方へ急上昇し、そのとき操縦士はこちらを見ていた。互いに命拾いしたなと喜びながら「敵の顔を見たか‼」「目と目が合った‼」と話し合ったのが昨日の出来事のように生々しく今もよみがえる。



機銃掃射　高橋徹さん画

2 回目の命拾い

2 回目の機銃掃射も、国民学校 2 年生の 1945 年 5 月半ばごろ、昼下がりの 2～3 時ごろ、蘇我踏切を仲間 3 人がそんなこんな話をしながら渡り切ったところで、道の脇から「速くッここへ隠れろ!!」と大人に怒鳴られ、横の小屋に 3 人が飛び込むと同時に「ザザザッ・・」と艦載機の機銃掃射を受けたが、私たちとそこのおじさんたちも無事だったし、建物も変わりなかった。おじさんたちに「にしら（お前たち）どこの誰じゃ？」ときかれ、どこそこのだれだれだと答え、「気をつけて帰れ！道草すんでねぞ」と言われ走って帰った。その時の艦載機も東の方角から西の方向(東京湾)へと飛んで行った。

2～3 日して学校の帰りに、お礼にと小屋のおじさんの所に立ち寄ったら、おじさん夫婦は笑いながら「ほれッ！これを見てみろ！」と、この間の機銃掃射の薬莢が 40～50 個入ったバケツを、地面にひっくり返して見せてくれたのにはびっくりしながら、物珍しく見入り、あれこれと触ったりしたのが今でも鮮やかに記憶に残る。

それ以後、両親は私の通学路は危険だからと言って変更され遠回りになった。このころ日立航空機千葉製作所内で働いていた飯場の朝鮮人が負傷したという話を聞いたことがあった。　　＊戦後 1 名は確認（「朝鮮人強制連行調査の記録　関東編 1 」P281 証言）

思い出したくない、嫌な蘇我町空襲の生臭い悲惨さを垣間見た

空襲警報で逃げまどう辛い明け方の体験

1945 年 6 月 10 日の明け方、日立航空機千葉工場のぶきみな空襲警報のサイレンに叩き起こされ、私は枕元の防空頭巾を被り家族とともに、近所の頑丈で大きな防空壕に所狭しと入らせていただいた。

暫くすると、爆撃機の轟音と共に防空壕は揺れ、不安そうな声でコソコソつぶやいていた時、「防空壕は危ないから早く山の方(現在の白旗)へ逃げろ！」と言われ、みんなして急ぎ足で大巌寺方向に向かって、蘇我駅前を通り過ぎ、蘇我踏切(現在は今井跨線橋)の手前にさしかかった時、今度は「早く隠れろ！」と言われるまま、みんな思い思いに線路わきの資材置き場の中へ潜り込むと、遠くから　「ドスン、ドスン」と鈍い音と地響きに驚きおののき、周りは今まで何事もなかったかの様に「シーン」と静まり、固唾を呑み息を殺した異様な重苦しい雰囲気と、外の様子が気がかりだが何とも言えぬ不安な一時が過ぎた。

ある人が勇気を出して外に出たとたん「なんだ！これは！どうしたんだ！」と訳の分からない声に、大人たちの一部が外へ出たのに続いて、日立消防隊の消防車の手動サイレンが蚊の鳴き声のように「ウ～ウ～ウ～」と弱々しく鳴るのが聞こえたとき、周りの人たちは「解除だ！解除！」だと叫びつつ外へ出たので私たちも外へ出た。

外へ出てみたら周りはうす暗く、空は鉛色で重苦しかった、よく見ると電線がちぎれた蜘蛛の巣の様に散らばり、剥がれ飛ばされたトタンや倒れかけた電柱などが道を塞いでいた。周りに目が慣れるにつれ大人たちの顔は黒く汚れ、ズボンは泥水につかったままだった。顔や衣装の汚れは子どもより大人がひどかった。ともかく、つまづかない様に、足元に気を付けながら、みんなノロノロ歩き力なく家へ帰った。

蘇我空襲のむごい悲惨な負傷者たちの姿は、今も脳裏に鮮やか

家に帰るや否や、近所の役人が来て「勤労奉仕だ！付いて来い！」と父親をどこかへ連れて行った。

それは夜になって分かった。蘇我１丁目付近が明け方、B29 の爆撃で家屋が滅茶苦茶に破壊され生じた多くの死傷者の救援活動と跡かたづけに多数の朝鮮人が飯場から動員されたと言う。

その日、今井町、蘇我町一帯の国道(現在、県道)は通行止めにされ、付近の人たちには「外へ出るな！」と言われたが、私たち数人はそれを無視して道路沿いの今井神社鳥居(日立航空機千葉工場正門入口の前)の後ろの茂みの樹に登り、身を隠して、何事があるのかと目を凝らし息をとめ静かに様子を探っていたら、なんとリヤカーに座ったまま腕のないような人、頭や顔を赤黒い包帯や手ぬぐいなどでグルグル巻いた人たちの痛々しい姿に「ゾッ」と身ぶるいするほど、恐ろしくもあり気の毒で、まともに見られなかった。次々と日立の正門近くの病院に運ばれた。そのあと、大八車、牛車にはお尻の辺りが血で染まり、ふくらはぎの肉がえぐり取られ、はみ出しているように血がにじみ出ている重症者たちが横たわった姿で運ばれてきた。

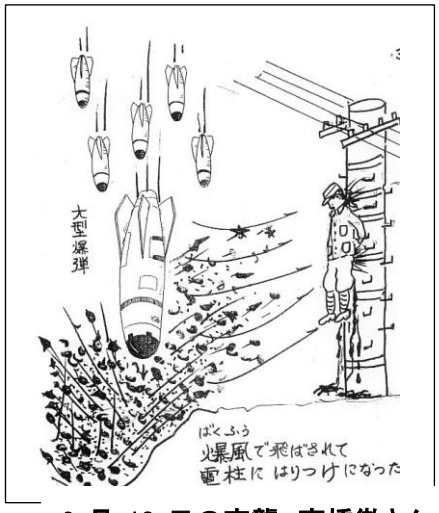
それに続いて、ムシロやゴザを被せた何台もの牛車が五田保(ごたっぽ)の方へ行ったので、福正寺(今井町)の火葬場に運ぶんだなと思った。

数日間、火葬場の低い煙突からは嫌なにおいとうす黒い煙が、毎日南風に乗って「飯場(五田保)に流れ漂い飯も食えなかった」、夜は「火の玉がうようよ浮いていて、外での立ち小便は怖い思いをした」と、戦後、飯場の人たちから「幽霊話」に随分聞かされた。この火葬場の跡には、現在慰霊碑が祀られている。

数日間の勤労奉仕を終えて帰ってきた父親は、蘇我町一帯は爆撃で家々はめちゃくちゃに壊され、がれきの中から多くの怪我人を助け出したり、死体を指定の場所に集めたり、壊れた家のがれきの後片付けをさせられた。こんどの爆撃の目標が２基の「ガスタンク」なのに一発も当たらず、「タンク」から離れた周辺の民家がほとんどやられた。

「戦争はひどいもんだ！こんなに惨いこととは知らなかった。今の話を忘れるでないぞ」と、懇々ときつく諭された。

現在の川崎町ＪＦＥスチール東日本製鉄所正門辺り(今井３丁目)から蘇我２丁目のはずれの間には、10m 四方の爆弾の穴が２個ずつ並び、雨水で無数の池になっていた。海で遊んでの帰りには、そこでみんなして体を洗ったりして遊んだ。ここは現在国道 357 号線。



6 月 10 日の空襲　高橋徹さん

＊私も、千葉空襲による朝鮮人の被害について関心を持ってきたが、死亡に繋がる資料を見いだせず、２～3 人の負傷者のうち１名確認。

「排他的民族差別の受け身の苦痛は言葉では言い尽くせない！」

私より年下のちびっ子らが、それも一定の距離を保ちながら「アイツ　鮮人だ！鮮人だ！」と、それも集団ではやすように叫ぶのを聞いても、初めの頃は、あの罵声が私に向けての叫び声だとは知らなかったし、今まで、その様な仕打ちを受けたこともなかった。それは「飯場」で隔離されていたからだと思う。

その様なわけで、それが民族差別だとは全然知らなかったので、何回かは相手にもせず、見向きもせず知らんぷりしたけど、あまりにも酷く「ヤッ！鮮人だ！」と叫びながら「アッカンベ！」、鼻に指を当てろうあの真似など色々なしぐさで仕掛けて来るたびに、私は「この野郎！」とありったけの大声と体で威嚇することで、暫くは母の言いつけを守り、我慢してきたけれど、これ以上は耐えられないと母親に言っても「知らぬふりをしろ」と言うだけだった。

このような民族差別を意識したのは、蘇我国民学校 2 年生(1945 年)の 5 月ごろからであった。それ以前は日立航空機千葉工場内の「飯場」から通学していたので、我が家の事情について知る人はいなかった。米軍による本土空襲と関連して、日立も大網白里町などに疎開し、我が家も日立の旧正門前の物置小屋(農機具など)、今井町 262 番地を借りて、改造した住宅に移ったのが 4 月ごろだったので、それ以降、大家をはじめ周りの人々に、我が家が朝鮮人である事は素早く知れ渡り、広がったと思われる。

ちびっ子らのいじめを無視し続けるので、奴らは石を投げながら「弱虫、毛虫、鮮人野郎！」と更になお一層激しく叫びながら迫ってくるようになった。奴らは一人の時は必ず私を避けるか、隠れてしまう癖に、複数の時は、よってたかって迫ってきた。(赤信号もみんなで渡れば怖くない)

頭や額にはコブを、顔は腫れぼったい傷、惨めな姿では帰れず、近くのどぶ川で顔を洗い衣服の汚れを落とし、何事もなかったかのようにそっと家の中へ入った。

この様な辛い日々は毎日のように続き、はなはだしくは家の前まで追っかけて来て「鮮人！帰れ！」と罵声を浴びせるようになり、母親は両手コブシを大きく振り上げ「この野郎！」と殴るしぐさで追い返したりした。

奴らは罵声と石をぶっ投げるだけではなく、こんどは棒切れを振り回したり、竹切れで突っついたり、差別的いじめは日増しにひどくなり、私ががむしゃらに立ち向かったものの、やられっぱなしで帰って来た哀れなせがれの姿を見た母親は、どうにもならない悔しさ、いたたまれないやるせなさ、惨めな苦しみに耐えられぬ腹立たしさで、「バカ息子！やられっぱなしで泣くな！何のために飯食ってんだ！オッパイを呑んだ力を出せ！」と怒られた。

それ以後、やつらに遭遇すると、カバンを盾にして顔をかばいながら突っ込んでいった。するとパラパラと逃げ出すので、追いかけ捕まえた野郎に、馬乗りになって、殴る、蹴る、踏んずけたりして反発したものの、今度は年上の連中を引き連れて私の帰り道で待ち伏せしていた。4～5 人に取り囲まれ、「生意気な鮮人だ！やっちまえ！」とよってたかって殴る蹴るのに併せ、ちびっ子らの復讐が、ところかまわず繰り返された。

私は、年長連中に死ぬつもりで歯向かい、手を掴み噛んだり、逃げる輩の足を引っ掴み噛んだり、棒切れや、竹切れ、石を投げるなど、力任せにやれることは何でもやり復讐した。私の反発
を食らった連中は、親と巡査を引き連れて、家へ抗議に来た。連中の親どもは「弁償しろ！謝れ！鮮人を懲らしめろ！」と騒ぎわめくので、母親は「あんた達の子どもがいじめた結果だ。仲良くしていればこんな事にはならない」と反論したら、巡査が「鮮人のクセに生意気だ！謝れ！」と往復ビンタ、母親は私に「お前も謝れ！」と朝鮮語で言われ謝ると同時に「日本語で話せ！」とまた往復ビンタ、「死にたくなければ、おとなしく言うとおりにしろ！」と怒鳴りつけて帰った。それからはちびっ子らと遭遇すると、差別的な暴言を吐くだけになった。

私はそれまで毎日、顔と脚は傷とアザだらけ、頭と額はコブだらけ。当時の怪我がもとで、左目に障害が残る。当時、医院に行った記憶はない。

6 月の下旬から学校へは行かなかった。

ある日、クラスで突然「鉛筆が無くなった！」と誰かが先生に告げると、先生は各自の持ち物をよく調べるようにと指示したが、見つからなかった。すると、先生に「〇〇お前だろう早く出せ！」と怒鳴りつけられ、「知りません」と答えると「みんな鮮人には気を付けろ！」と一喝した後、鉛筆は見つかった。

数日後、今度は「消しゴムが無くなった」と騒ぎ立て、みんなが探しても見つからなかった。「鮮人！〇〇前へ出ろ」と言われ指示された教壇に上がると「またお前だろう！鮮人のくせに生意気だ！」と、言うと同時に背負い投げで飛ばされた私は、うさぎ跳びで机の上をバタン、バタンと跳び、自分のランドセルを手に取り、先生に向かって「こんな学校なんか来るもんか！」と精一杯大声を張り上げ、窓から校庭に飛び降り、白旗町の方向に逃げてからは、学校へは行かず、山で時間を過ごす連中と一緒に遊んだりして、鵜の帰りを見て家へ帰った。

一学期の終わりまで、家では学校へ行けとか何をしているのか聞きもせずに、毎朝弁当を持って家を出た。二学期の始め、担任の先生が訪ねられ、学校へ戻るようにと謝罪したけど、父は「朝鮮は解放されたので、故郷へ帰るので気を使わなくていい」と言い、米国製タバコ「ラッキー」を 1 カートン差し上げ、丁寧に断った。

それから 9 月半ばごろまで、私は家で父親から「ハングル文字」と漢字「千字文」を習い、五田保飯場での「国語講習所」が始まると、そこへ行った。だが行っても同じ同胞なのに信じられず、ケンカばっかりしたので、父親に「行くな」と言われ、家での勉強が 1946 年の 3 月ごろまで続いた。

差別的暴言と暴力はしゃくにさわり、我慢するのは悔しくて胸が塞がり死ぬ思いだった。ケンカで悦びを感じる人間不信に「乱暴な性格の持ち主」と嫌われ避けられたが、朝鮮学校で温厚な性質と民族性を身につけることができた。